三、シバに関する若干の考察

ここでは、昭和五十九年の事例をもとにして、二日、三日、四日の祭事に使用されるシバの種類、数やその機能について考えてみたい。この点については、従前の小野重朗氏の報告では必ずしも明確でなかった④。しかし、この点は、南九州の柴祭りの全体の中での池田の柴祭りの位置づけをするためにも必要なことであろう。以下事例をもとに検討したい。

㈠シバの種類と数

①旗山神社のシバ

十二月三十日、池田の旗山神社においてシバキリされる榊柴は次のものであることがわかる。㈠鳥居の根本に立てるシバ二本、㈡本殿その他神社などに飾るシバ数本、㈥若水汲みに用いるシバ一本、㈢シバフセするシバ十九本である。これらのシバは、特定の山のものを切ってくるのではなく、その年、その年によって異なる。また、このようなシバキリの役目は、柴祭り以外の旗山神社の例祭にも行うということであり、柴祭りのみに行われることではない。

さらに、このシバとは別に正月三日の日に、伶人の前迫直義氏が山に入り採った七種のシバを束ねたヤマンカンシバがある。このヤマンカンシバは以前は押領司勝氏宅からシシ肉の稟苞と共に作って出されたものであるという。現在の前迫氏に引継がれたのは、押領司氏から伶人役を引継いだという理由による。

②立神神社のシバ

一方、安水のタッガン（立神）神社ではどうであろうか。ここでは、一月二日に切られる榊柴の数は、タッガンサァーを勧請するシバ一本と、ショウホイ、伶人たちがカシキと称して手に持つシバ四本である。

㈡主なシバの動き

それでは、これらのシバのうち、祭事の中で中心的な位置を占めると思われる、タッガンサァーのシバ、旗山神社でシバフセ・シバコシするシバ、ヤマンカンシバの三種類のシバについて、その動きを追って考えてみることにする。

①タッガンサァーのシバ

先ず、タッガンサァーを勧請するシバは、二日の祭の始まる直前に神社の脇で切られるものであり、池田の旗山神社でみられるシバフセの儀礼はない。ショウホイが幣と麻の緒をつけ、祝詞を奏上することで、タッガンサァーが勧請される。このタッガンサァーのシバは、タウチ、タネマキ、ナユトリなどのタウチバジメの行事の間、神社の御戸の前に立て掛けられている。そして、この行事が終り、一行が安水に向うと、その行列の先頭に奉じられる。まさに、一行はこのタッガンサァーのシバを押したてて進んでいるといってよい。

安水部落へ着くと、部落のウッガンが祀られているウッガンヤマの木の根本にカカラシて（一時的に休まれるの意）、サカムケ（境迎え）をする安水茂徳家に入ることはない。

このことは、白井でも同様である。白井の部落では、十二戸の家が輪番制でサカムケの宿を勤めるが、その宿では家の門口の飾りより外側に、

タッガンサァーのカカラレル場所を作る。タッガンサァーのシバは決して、門口から中には入ることはない。

さらに、池田においても同じことが言える。つまり、旗山神社に到着するとすぐに御戸の前に立てかけられる。その後一行が行くショウホイの家や、フッカブロに入りに行く伶人の仮屋氏の家にも入ることはない。

つまり、タッガンサァーのシバは、一月二日は常に祭りの行列の先頭に位置し、安水、白井、池田のいずれにおいても、様々な事始めが行われる人間の家、屋敷に入ることがなく、常に聖なる場所（ウッガンヤマ、榊柴で囲われたシラスの盛土、旗山神社）に祀られることがわかる。

また、このタッガンサァーのシバは、正月三日、四日にも祭りの行列の二番目の位置を占め、すべての祭場をめぐり、その後、旗山神社の御戸の前に立て掛けられたままにされる。そして、正月二十日のシバフセのときに、旗山神社の前の大楠の根本の洞の中に、葉を裏がえしにして伏せられる。つまり、このシバは正月二日から二十日までの間活動していることになる。

②旗山神社でシバフセ・シバオコシされるシバ

十二月三十一日にシバフセされるシバは、㋑カカリンシバ五本（ヤマンカンシバがかかる柱用一本、オノサオがかかる柱用四本）、㋺三日のコノサカ、二のシバで用いるシバ（コノサカと二のシバで木の根本にX状に立てるシバ各二本ずつ四本、山の神の絵姿を張るシメ縄用二本）、㋩四日の日に用いるシバ（一のシバ、二のシバ、三のシバ、高尾木の根本にX状に立てるシバ各二本ずつ計八本）である。しかし、『神社神事工事』によれば、㋑のカカリシバの中には鳥居用としてのシバ二本があったこと、㋺のシバの中には、これらの外に山神様（ヤマンカンシバ）がかかるためのシバ二本と、ショウホイがシシガリのときに手に持つシシオイシバが含まれていたことがわかる。これらのシバは、三束に分けてまとめられ、ショウホイによって㋑、㋺、㋩の順に重ねられて、葉を裏がえしにする形で拝殿の隅にシバフセされる。

こうしてシバフセされたシバは、三日の早朝、若水によって祓われたのち、ショウホイによって、葉を表側にする形でシバオコシされる。シバオコシされたシバのうち、カカリシバはすぐに拝殿の柱にかけられ、このうち四本にはオノサオが掛けられる。おそらく鳥居のシバもこの時に立てられたのであろう。

午後は、このシバオコシをした㋺のシバを先頭にして、コノサカに行く。コノサカでは、このうちの二本を杉の木の根本にX状に突き立て、その上にタッガンサァーのシバ、ヤマンカンシバ、金幣、オノサオなど一行が奉じてきたものすべてを立て掛け、谷の向こうに見える半ケ石山を領く。おそらく『神社神事工事』の時分に、ヤマンカンシバは別途にX状にシバを立て、それに立て掛けたものであろう。

さらに、その脇では、二本のシバを立て、シメを張り、山の神の姿絵を下げ、餅盗人を串で刺してこらしめる。これは悪いものが入らないようにするためだという。

これらが終了した後に、それらの場所の前の小高い所の広場でシシガリハジメが行われる。この時、かつてはショウホイがシシオイシバと称するシバオコシをしたシバを手に持っていたのである。

こうしてシシガリハジメが終ると、X状のシバと山の神の姿絵のシメ

とはそのままに残して二のシバへと向う。残されたシバは二十日の日のシバフセまで活動を続けることになる。

二のシバでは、コノサカと同様にX状に立て、タッガンサァーやヤマンカンシバを立て掛け、笹原カクラを領いて、天開きをして帰る。X状のシバは、そのままに残される。

四日の祭りの行列は、この八本のシバを先頭に、一のシバ、二のシバ、三のシバ、高尾と巡行する。シバは、木の根本にX状に突き立てられ、そこにタッガンサァー、ヤマンカンシバなどを立てかけ、山の神を天下らせ、一のシバでは仮屋山を領く。二のシバでは段部落の段平治氏のサカムケを受け、同家のウッガンを祀る。このウッガンは、猟の神としてこの地の猟師たちの信仰を集めている神である⑤。三のシバでは山の神を天下らせ岩元カクラを領く。高尾ではジュオウ（竜王）の神を天下らせ神之川（錦江湾沿いの部落）の海川を領くシバは祭事が終ると、X状に突き立てたままにしておく。この祭事が終ると山に入り狩りをしたり山仕事をしてよいという。

③ヤマンカンシバ

このシバは、三日のコノサカへ行くための神事が始まる前に、カカリシバの掛けてある拝殿の柱に掛けられる。このシバは、三日、四日の行列の中での位置が、年ごとに不安定で、昭和五十九年には、三日が金幣の後の位置で四番目、四日はタッガンサァーの後に位置し、前から三番目に位置している。しかし、『神社神事工事』では、タッガンサァーの次に位置することが記されており、昭和五十九年の四日の事例がそれに一致している。各シバではいずれもX状のシバに立てかけられる。四日の祭事が終了したら、拝殿のカカリシバの掛った柱に掛けられる。これは正月二十日にシバフセされる。

以上が、柴祭りの中心となるシバの動きである。これによって、①のタッガンサァーのシバが二日から四日にかけての祭場を、また、③のヤマンカンシバが三日から四日にかけての祭場を巡り歩くのに対し、②のシバオコシされたシバが、各目的の祭場のみに留まること、つまりX状に突き立てられた状態におかれ、次の祭場へ移動しないということが明確になったのである。従来の小野氏の報告事例では②のシバがあたかも①や③のシバと同様、各祭場を巡り歩くかに記されている③が、明確な差異のあることがわかる。

㈢シバの機能と性格

これまで見てシバの動きを通して、この柴祭りのシバがいかなる機能、性格を持つかを考えてみたい。

①タッガンサァーのシバ

タッガンサァーのシバは、タッガン（立神）の神の勧請が終ると、先ず、神社の御戸の前に立てられる。そして、このシバの前でタウチハジメの行事が行われる。これはタッガンサァーのシバがその活動を始めた後に行事を行なっていることを意味している。また、安水ではこのシバがウッガンヤマにかかった後に、ウタハジメ（タネマキハジメでもある）、やハリオコシがあり、これ以後、安水では歌を歌ってもよいとか、針を使っても良いという。いわゆる事始めが行われる。白井でもこのシバが門口の外の榊で囲われたシラスの盛土にかかった後に、ウタハジメ（タ

ネマキハジメでもある）、ナンコハジメ、ハリオコシの事始めが行われる。特にナンコハジメは、ショウホイと宿の亭主が最初にナンコを行ない、その後、伶人と白井の人々とが行なう形をとる。また、安水や白井では、このシバが家の前を通り過ぎると、亭主が畑に出て東を向いて鍬で三回打ち、ユズリハを立てる。クワオコシと言い、事始めである。さらに、池田ではこのシバを旗山神社の御戸の前に置いた後に、フッカブロに入る。これが池田の風呂の使い始めで、これ以後池田では風呂を使って良いと言われる。これもまた事始めである。

このシバは、三日のシシガリハジメを始めとする四日までの祭事にもすべてかかわっている。人々は、「タッガンサァーと旗山さんが結婚して狩りをする」と表現する。

このように、このシバの特徴は、各祭場において常に事始めの祭事にかかわっていることである。その事始めの範囲も農耕、日常の家庭内での生活、狩猟と極めて幅広い。これは、このタッガンサァーのシバが多様な神格を備えているからであると言える。

②旗山神社でシバフセ・シバオコシしたシバ

このシバは、三日のシバオコシによって活動が始まる。オノサオやヤマンカンシバがかかる神社の柱に掛けられる。また、かつては鳥居の根本にも立てられたという。さらに、コノサカを初めとする三日、四日、の祭場では、木の根本にX状に立てられ、その上にタッガンサァー、ヤマンカンシバ、オノサオなどを重ねて立てかけられる。また、コノサカでの山の神の姿絵のシメ縄を張るシバにも用いられている。

そして、祭事が終了した後は、そのままの状態でそこに置かれ、正月二十日に神社でシバフセが行なわれると同時に、このシバもシバフセされるのだという。

こうしてみると、このシバフセにはそこの場所を祓い清め、守り固めているという働きが極めて濃厚に認められる。X状に立てる立て方などは、民俗で良くみられる悪霊の侵入を防ぐ呪術的な形態である。つまり、人間たちの生活の方法であるシシガリの事始めや、生活の糧を得る仕事場としてのカクラ（狩り場）や山を領く大切な場を、守り固めていると考えられる。大隅、志布志町四浦の猟師は猪を解くときは必ず椎の柴の上で行なわねばならず、終ったら必ず柴を伏せるという。このシバもそうした伝承との関連を考えさせる。

③ヤマンカンシバ

このシバは、七種のシバを束ねそれに山の神幣をつけたものである。このシバは、コノサカでは外のものとは別にX状のシバを立て、それにかかったのだという。何故であろうか。それはこのシバがシシガリハジメやカクラを領くために天下らせる山の神の勧請を行うシバとして考えられていたのではないのか。そのための幣であると理解できよう。しかし、そうであれば①のタッガンサァーのシバや、②のシバオコシをしたシバなどとはどのような関係になるのであろうか。

この祭りの四日の二のシバの祭事にかかわる段家に伝わる「山神之御地」⑥の中に認められる次の部分の記述は、この問題を解く糸口を与えてくれる。

山之神之祓

「奥山

ムカシノリウシハ大道ツルギヲ腰ニサシ小トウノツルギヲユキ持テ山口ニ差入リ中山サシ通奥ノミ山ノ奥ノ嵐ハケシキ所ニシイノ木七本シャカ木七本ソベラノ木七本廿一本ウチ直シウラウツムキリシバノ社ヲ津作是社山ノ神ト歓請申也（・筆者）

同祓

「中山

中此ノリウシハ大唐ツルキヲ腰ニサシ小トウツルキヲユキ持テ山口サシ入中山ニサシカカリミ山ノ嵐ハケシキ所ニ志ゐノ木七本釈木七本ソビラノ木七本廿一本ウチ直シウラ打ツムキリ柴ノヤシロヲ作是社山ノ御神ト勧請申也（・筆者）

同祓

「山口方

今ムキノリウシハ大勝ツルキヲ腰ニサシ小道ツルキヲユキ特テ山口ニサシカカリカタ平ノ嵐ハケシクシイノ木七本釈木七本ヒイラ木七本廿一本ノ木ウチ直シウラウツムギリ柴ノ社ヲ作リ是社山ノ御神ト勧請申（・筆者）

つまり、ここではシイノ木（椎）、シャカキ（榊）とソベラ（トベラの意であろう）またはヒイラ木（柊）の三種のシバを打ち立てて社を作って山の神にするという考え方が認められるのである。これは、ヤマンカンシバと極めて類似した考え方ではないか。ヤマンカンシバの七種のシバの中には椎、トベラが入っており、しかも『神社神事工事』によれば榊も含まれているのである。この山之神祓の中にある山の神の考え方がヤマンカンシバに影響を与えていることはまちがいないであろう。

さてこうして、シバ祭の中心となるシバの機能と性格についてふれてみると、三種のシバともいづれも山の神の性格を濃厚に保有していることがわかる。しかも、どうやら②のシバが最も原初的な形で、次に③のヤマンカンシバ、そして最も新しいのが、山の神的性格と同時に農耕、や日常生活までをつかさどる①のタッガンサァーのシバということが言えるのではないかと考える。この三種のシバが折重なって、二日、三日、四日にかけ各祭場をめぐり、生活の主要な事始めをなし、さらに生活の領域を宣言し、正月の間中それを守り固めているのである。こうしたシバの持つ機能、性格こそが柴祭りの本義であると言える。

四、あとがき

以上、大隅町池田の旗山神社をめぐる柴祭りについて、事例報告と若干の考察を試みた。特に、シバの動き（流れ）に焦点を当てて検討した結果、池田の柴祭りのシバの機能、性格をいくらか明らかにできたのではないかと考える。しかし、そのことによって、大隅に伝承されているシバに関する資料の集積の必要性と、奄美に残るシバサシの行事との関連を探ぐる必要性とを強く感じた。最後に、この池田の柴祭りの事例中心の報告を誰よりも強く勧められたのが、当館の専門委員である小野重朗先生であることを付記しておきたい。

註

①千葉徳爾『狩猟伝承の研究』・昭和四十四年・風間書房

②佐々木高明『稲作以前』・昭和四十六年・日本放送出版協会
③小野重朗『南九州の柴祭・打植祭』昭和三十九年、私家版、「柴祭と打植祭」と改題し、『農耕儀礼の研究』（昭和四十五年・弘文堂）に所収。
④小野重朗前掲書
⑤千葉徳爾「山村調査報告」（『大隅半島の民俗（中間報告）・昭和三十三年・大隅半島民俗調査委員会）
⑥千葉徳爾「山村調査報告」、『狩猟伝承研究』
なお、同じ段家には同種の別の文書のあることが、永松敦氏によって発表されている（「大隅半島の山神関係史料」・『尋源』第三十四号。昭和五十八年）が、その中にも同様の「山之神祓」が見える。